

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1992 1

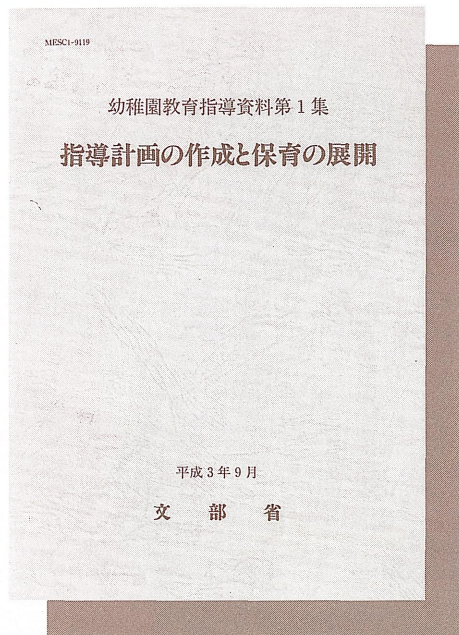


第91巻 第1号 日本幼稚園協会

幼稚園教育指導資料 第1集

「指導計画の作成と保育の展開」

新教育要領の趣旨にそった幼稚園指導計画の作り方と保育の展開方法について事例を中心にまとめた解説書。



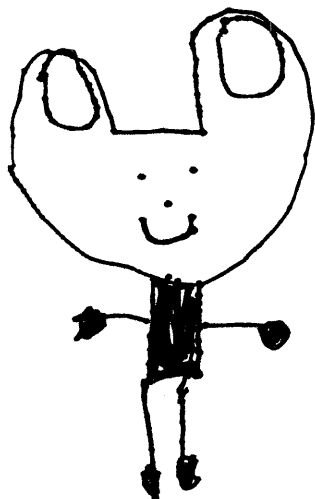
保育の基本となる指導計画の考え方や環境構成、活動の展開、教師の援助、保育の展開のあり方など保育現場の身近な問題について総合的にとらえたもので、幼児の発達に合わせた保育実践の指針となるもの。

文部省・著 A5判・88頁・定価110円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

幼 児 の 教 育



第91卷 第1号

幼児の教育 目次

——第九十一卷 第一号——

© 1992
日本幼稚園協会

写真・子供讃歌……………(4)

△巻頭言▽保育の研究について……………岡田 正章……………(6)

受容することをめぐって……………津守 真……………(8)

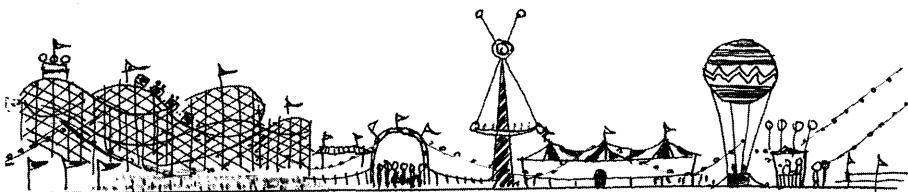
保育への視座(1) 若い保育者の方々へ……………河邊 晃……………(13)

附属幼稚園の教育(10) 三学期の保育……………村石 京……………(18)

幼児の笑いとその保育における意味(1)

一歳児の笑い……………友定 啓子……………(22)

二歳児との出会い……………守永 英子……………(31)



雪兔く輪かんじきとスキー……………皆川美恵子…(35)

幼児虐待を考える(5)

養護施設に於ける虐待児の入所事例……………藤野 泉…(39)

園庭より(16) 風のすがた……………松井 とし…(48)

チェコ便り(11) J・A・コメンスキー

T・G・マサリクの講演から(3)……………大梶 優子…(50)

ある日の育児日記から(13)……………佐藤 和代…(56)

若いお母さんたちへ 息子はやっぱエイリアン……………山本 みゆき…(57)

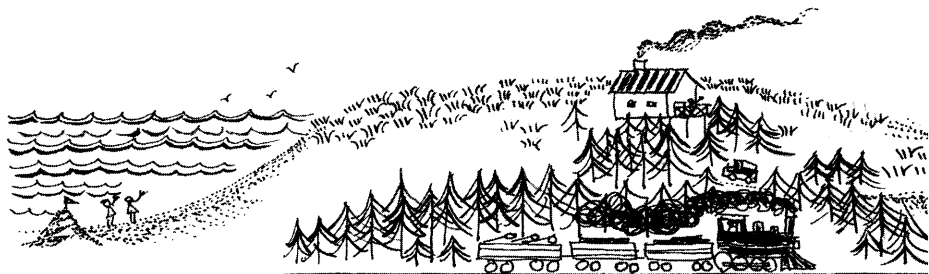
表紙・平野 清／扉題字・堀合 文子
扉カット・お茶の水女子大学附属幼稚園園児

カット・福田 理恵

編集委員・本田 和子／豊田 一秀

吉岡 晶子・岩上 節子

編集部・大沢 啓子





子 供 讚 歌

大きい組のお兄さんたちが みんなでついてくれた

おもち おいしいね

去年は 二つで おなかいっぱいになったけれど

今年は大きくなったから いっぱいたべるんだ



撮影・平野
清

保育の研究について

岡田 正章

「乳幼児保育の諸問題に関する研究者、幼稚園、保育所等において、実際保育に従事しつつその理論的基礎を求めているもの、一般に乳幼児の問題に深い感心をもち、子どものたくましい発達をこいねがう人々は、それぞれの立場から、この学会に会員として参加し、学会の目的（筆者注・乳幼児を心身ともに健やかに育成するためには、子どもに対する深い愛情とともにその保育に科学的な基礎をもたせなければならぬ）。この保育についての科学的・理論的研究を深め、また、保育の研究に関係のある個人

及び団体の連絡を図り、もって保育事業の進歩に貢献する」とするところに協力することを強く希望する次第である」

この文章は、昭和三年一月二日、日本保育学会が発足するにあたり、学会の趣旨を明らかにするよう示された学会趣意書のなかのものである。

発足時の学会々長は、本誌「幼児の教育」の編集主幹を長年にわたってなさっていた、当時の東京女子高等師範学校教授・附属幼稚園主事（現在の園長）倉橋惣三先生であった。倉橋先生の後に山下俊郎先生が、会長をなさり、その後、平成三年五月まで莊司雅子先生が会長をなさり、日本保育学会を今日の姿にまで発展させてこられた。

平成三年五月、第四十四回大会開催にあたって、私が莊司先生の勇退ということで選出され、四人目の日本保育学会会長に選出された。発足当時と異なり、幼稚園は、園数一五二九園、園児数一九万八九

四六人、教員数七〇一九人から、今日では園数一万五〇四〇園、園児数一九七万七五八〇人、教員数一〇万一五〇二人となっている。また、保育所は、園数一七八七園、園児数一五万八九〇四人から、今日では園数二万二七〇四園、園児数二〇〇万七九六四人、保母数一七万九五七七人となっている。大変な増大である。大学・短期大学・保母養成所などで保育の研究にあたっている研究者も非常に多くの数となっている。

これらの方々が、それぞれの立場に限られるのではなく、相互に理論的研究と実践的研究とを交流し、また、ともすれば幼稚園と保育所のひとたちが行政のわくにとらわれて常に分離されている制約を越えて交流し、その研究成果を豊かなものとするのが、日本保育学会の他の組織にみられない大きな特色となっている。

現在会員となっている約三〇〇〇人の方たちもこ

れら三つの立場の方たちで、年一回開かれる研究発表の大会でその真価が発揮されているが、今後は一層その特色が充実したものとなることを期待したい。

研究大会での研究発表も、昭和二三年の第一回では一二件であったが、昭和四四年の第二二回で一〇〇件を越え、昭和五二年の第三〇回で二〇〇件を越え、昭和五七年の第三五回で三〇〇件を越え、昨年の第四四回では三六三件が発表された。大変な発展である。

これからも、役員の皆さんの協力をいただきながら、日本保育学会が国内・国際の両面において保育事業の発展に寄与し、会員の研究が一層深まるよう微力をつくしたい。また、心ある方たちが新たに会員となって、自らの研究を開拓されるようになることを望みたい。

(明星大学)

受容することをめぐって

津守 真

近頃、大人が子どもを受容するというのでは不十分で、大人も遠慮なしに感情を子どもにぶつけることが必要だという議論をきくことがある。私も大人が一方的に我慢して子どもものしたいことをやらせるというのではおかしいと思う。

それでは大人が、「危ないから」「汚いから」やめなさいと、直ちに口を出せばいいかといえ、そうではない。それは大人の側の枠に大人が反応しているのであって、そこには相手の人間が不在である。それが教室という密室の中で行われると恐ろしい。保育者には、子どもの側に身をおいて見る自制心がなければならない。子どもには子ども自身の考えがあることを認め、ひとつひとつの行為の中にひそむ子どもの思いを発見しようとする知性が、その自制心を生む。

そして更に、相互にやりとりする中に、子どもの姿は一層はつきりとあらわれる。受容

という語だけではあらわせない、継続する中で深められる関係が保育である。

こんなことを考えていたとき、私は次のようなことに出会った。実践の場にいると、考えていたことがすぐに確かめられるのでありがたい。

一、

A 夫がはじめて私共のところに来たとき、庭の溝の端にはめてある四角い格子の穴にまつまっている土をひとつずつ落として、穴が通るようにした。それからその格子を持ち上げて地面に置くと、その格子にひとつずつ丁寧に土をつめた。全部つめるとその格子を持ち上げて、またその土を全部落とし、穴が通るようにした。A 夫は何度もそれを繰り返した。

私は、はじめ、この子が何をしようとしているのか分からなくて、格子を持ち上げようとしたときには、「取れない」「危ない」と言って、手伝うのをためらっていた。そんな私にはかまわずに、A 夫は苦心して重い格子を持ち上げ、穴に土をつめたり落したりを繰り返したのだった。それをやりながら、私はこの子の耳が聞こえないことに気が付いた。この子は聾学校の幼稚部にいて、私共のところには毎週一日だけ来ている。私は、この行為は耳の聞こえない子どもには特別な意味があるのではないかと思った。

コミュニケーションとは、向う側との間につまった妨げを取り除いて、気持ちや意図が相手と通じることである。耳の聞こえない子どもにとって、相手とコミュニケーションを

通じさせたいとの願望は、普通以上に強いだろう。そう考えたとき、この遊びに協力しようという気持ち私が私の中にはつきりと湧いてきた。この遊びはただのいたずらではない。子どもの真剣な行為である。困られるという大人の観点からだけ見てはならない。

二、

数か月後、私がA夫と半日過ごした日、朝登園したA夫は裏庭にとんでゆき、マンホールの丸い鉄の蓋を持ち上げてあげようと試みた。蓋は重くて地面にしっかりと付着していた。A夫の力では動かず、私に手伝ってくれと要求した。いつもA夫は他の保育者を相手にして同様のことをしているのを見ていたので、私も蓋をあげようと試みたがうまくいかない。するとA夫は室内の道具箱からドライバをとって来て、それをてこにして蓋をあけ、私もそれを手伝った。

マンホールの中をのぞくと、土管が横に三本通っており、その中の一本から水が流れこんでいた。A夫は両手を水の流れるほうに振って、あちからこちらに水が流れているよと私に知らせた。それからA夫は室内に走ってゆき、流しにえのぐを流して、急いでマンホールにもどった。これでどの流しの水がどの土管につながっているかを目で確かめることができる。裏庭にはマンホールがいくつもある。A夫はひとつの蓋をしめると、次のマンホールへとゆき、いくつかの部屋の流しに色を流して、どの土管にどの流しが連絡しているかを調べた。

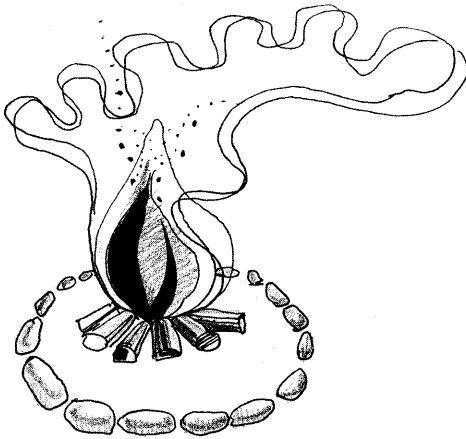
日頃は、私は地面の表に出ている蓋しか見ていなかったが、この日、私は地面の下に水の流れる経路が入り組んでいることにはじめて気が付いた。私はひとりの実習生とA夫と一緒に、それが面白くなって、どの流しがどのマンホールに流れこむのかを調べて回った。それはもはやA夫ひとりの行為ではなく、私共の共同の行為となった。はじめのうちは、いくらかためらう気持ちもあったのに、いつの間にかこちらの方が先に立って調べていることにわれながら驚いた。やりとりするうちに、子どもの世界が大人にも体験されている。ことは以上に、共通の体験を通してコミュニケーションがなされている。

子どもと応答するやりとりの中で、子どもは知られている。子どもにとっても、大人とやりとりする中で、大人は協力者であることや、大人の周囲に対する配慮・危険に対して払っている注意などを知る者となっているだろう。

受容するというのは、はじめは子どもの行為の意味が分からぬままに、その行為を直ちに否定するのではなく、互いにやりとりするうちに、次第に子どもの思いが見えてくる一連の行為の最初の部分を、外部から見たときの呼称なのではないだろうか。そう考えると、受容するのが良いか悪いかという議論は、その問いの立て方が適切ではない。たいせつなのは、子どもとやりとりする中で、子どもの心の思いを知り、子どもが追求していることを助けるように、互いの関係を深めてゆくことである。

ここに記した次の週にA夫が来たとき、私はこの小論を書いている最中だったが、A夫はこれまで数か月間つづけてきたマンホールの蓋をあけることをやらなかった。他の子どもが絵の具を使う傍で、絵筆をもって描いたり、手に色をつけて手形を作ったり、紙粘土を一杯にこすりつけて遊んだ。A夫の生活はマンホールの水路から次の局面に向かっていくように思われた。ひたすらマンホールに向かって走っていた子どもが、目を上げて大人の顔を見るゆとりが生まれていた。

(愛育養護学校)



保育への視座(1)

——若い保育者の方々へ——

河邊 杲

ある幼稚園の研究会の席上で五歳児クラス担任の先生が、「Aちゃんは、日頃とっても細かいことによく気がつき、ものごとをよく観察し、よく考えることができる御子さんである。ある日ガラスの瓶にさしてあった草花の茎から根が出ていたので、きっとAちゃんがこれを気付き根のことについていろいろ考え、そのことを何か話してくれるだろうと思っています。期待通りAちゃんは根の出てい

るのを見つけて、じっと見ていたが、『先生、この草、根を出しているよ。きつと土のところで根を出したかったのだよね。』と言ったので、意外なことばに驚くと共に、なんというすばらしい発見の態度だろうと、発見と同時に草の心もちになれるような感じとり方に感動しました。」と話されて、先生方とあらためて子どもの感受性のすばらしさについて話し合ったことがある。



私もこれに触発されて思い出したことがある。それは、ある幼稚園の砂場で左手にスコップをもって砂あそびをしている男の子を見つけて近づくとやにわに右手をつき出し、

「この虫どうして脚を動かしているか知っている？」と問いかけて来た。よくみると親指と人さし指につままれて必死にもがいているかなぶんであった。とっさの質問に瞬間「昆虫の関節のことを説明してもわからないだろうし」と判断し、「おじさんわからないからぼく教えてよ」と言った。とたんにはね返えって来たことばが「とびたがっているんだよ。」であった。私もその時の幼児の表情や声が今も鮮明に残っている程、幼児の感受性のすばらしさとそれがことばになったそのことばにほんとうに感動したのである。

それ以来、幼児は感覚を通して全身で自分をとりまくいろいろなものや人などに向き

あっているということ、そしてその時その場へ向きあった事実とその時その場の感受性を見逃さないように、また大切にしたいと思うようになって来た。

同時にこうした幼児と出会うごとに、このような、すばらしい感受性をもってまわりの環境に働きかけている幼児たちが、その後成長する間に、いつどこでどうしてこのすばらしい感性を弱め、退化させ、失ってしまったのであろうかと考えるようにもなった。

また、保育にあたっているいいないにかかわらず、私も含めて大人たちがこの感受する力をもう一度とりもどしたいと願うと共に、あるいは、ひょっとすると、幼児と一しよに生活するならば、弱くなったり、失いかけている私たちの感受性をとりもどしたり、みがきがかかることができるかも知れないとも思うようになった。

幼児と生活を共にされている方々は、幼児が、どんな小さなものについても、その生命の働きにふれ、知る前に感じとっていることに気づかれています。

そこで、このことに関連して、是非若い保育者の皆さんに、こうした体験の事例を数多く具体的に聞かしていただきたいと願いますと同時に、このことに関連した本を是非読んでほしいとここに紹介したい。

それは、最近地球環境への告発の著書として世界のベストセラーとなった『沈黙の春』の著者であるレイチェル・カーソン女史（アメリカの海洋生物学者）が病気で亡くなる直前に、是非これを世の光にとまめあげられた『センス・オブ・ワンダー』（佑学社）という本である。诗情溢れる美しい文章のすばらしさ（訳者上遠恵子さんの訳もすばらしい）に感動するだけでなく、彼女が、甥の

ロージャの母親が亡くなった為に幼児時代をあずかり、一しょに森や海辺を散歩したり、夜空の星をながめて暮らしたロージャとの生活を書きしるし、世の人々に「あなたの子どもに驚異の目を見はらせてほしい」と訴えられていることに強い共感と共鳴をおぼえるからである。

五十六歳で生涯を閉じられた彼女は、雑誌に発表したもののこれを単行本としたいと願いながら間にあわなかったのを、友人たちが死去の翌年アメリカで刊行され、日本では昨年六月に訳本として刊行されたということである。ところでこの著者は、本文のはじめから、訳者のあとがきまですべてを読み終えたとき、彼女の訴えたかったことの意味が感受でき、理解でき、さらに現実化したくなると信じるので、本文の抜粋については躊躇するのであるが、前述したことに関するところに

限って、彼女の述べているところをここに抄述することにする。

「子どもといっしょに自然を探検するといふことは……それはしばらく使っていなかった感覚の回路をひらくこと、つまり、あなたの目、耳、鼻、指先のつかいかたをもう一度学び直すことなのです。

わたしたちの多くは、まわりの世界をほとんど視覚を通して認識しています。しかし、目にはしていながら、ほんとうには見えていないことも多いのです。見すごしていた美しさに目をひらくひとつの方法は、自分自身に問いかけてみることです。」と、そして、

「たとえ、たったひとつの星の名前すら知らなくても、子どもたちといっしょに宇宙のはてしない広さの中に心を解き放ち、ただよわせるといった体験を共有することはできるのです。そしていっしょに宇宙の美しさに酔

いながら、いま見ているものをもつ意味に思いをめぐらし驚嘆することもできるのです。」と。さらに、

「子どもたちが出会う事実のひとつひとつがやがて知識や知恵を生み出す種子だとして、さまざまなゆたかな感受性は、この種子をはぐくむ肥沃な土壌です。幼い子ども時代は、この土壌を耕すときです。」と述べている。

ここで思いあたることがある。それは子どもたちが昆虫をつかんで来たり、草花を摘んで来たりすると、すぐ「それは何という名の虫か。」「何という花か。」をたずね、図鑑を与えて調べさせることを幼稚園・保育所や家庭の親たちまでがやっている。これは動植物研究の中の分類学的研究の「同定」という研究過程の一作業である。

「どんなところに、どのように棲息していたの?」とか「どのようにに生育していた



の？」などと動植物の生態に関心や興味をもつようには誘導して来なかったように思う。地球環境の生態系が危機にさらされて来ている今日、世界に随分遅れをとっているのもうなずかれるのである。

それにもまして、幼児を育てるとき、この

ような分類学的、生態学的な関心のもたせ方以前の問題として「神秘や、不思議さに驚嘆する感性」のところに、もっともっとかわり共有できるような保育の見直しが緊急の課題ではないでしょうか。

（元洗足学園短期大学）



附属幼稚園の教育 (10)

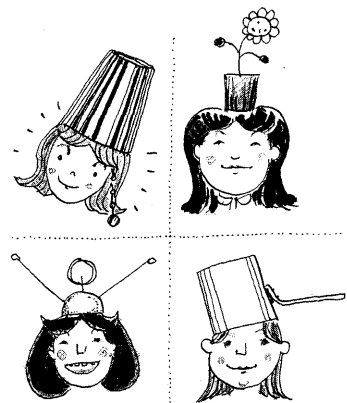
三学期の保育

村石 京

三学期はこの年度の最終学期です。お正月の休みが終わって、三学期の始まる日を迎えました。

子どもたちみんなが楽しく園生活に入り、充実して安定した日々が送れるようにと心を配りたいものです。

冬休みは比較的天数も短くて、すぐ日が過ぎてしまいますので、休みあけといっても夏休みが終わった後の二学期初めのようなとまどいのような



感じは見られなくて、まるで昨日の続きのように友だちと遊び出したり、話しあったりしている様子が見られます。これは一つには、友だち同士のつながりが以前と比べてずっと強くなり、親しみも深くなってきたことも大きな理由と言えると思います。

日数としては短かったのですが、冬休みの間には家庭の中で様々な体験がありました。例えばク



リスマスのことや、新しい年を迎える仕度をしたこと、そしてお正月のこととか、旅行に行ったことなど、いろいろな事柄が子どもたちの話題に上ってくることもあります。生活の中の体験として、気づいたことや嬉しかったことなどを話し

合ったり、絵に画いたりすることも表現を伸ばしていく上での良い機会だと思います。遊びとしては、お正月の遊びとして、かるた・すごろく・羽子板・こま・凧等といったものを教材として保育室に用意しておく、子どもたちは喜んで遊びはじめます。家庭での経験や遊びが幼稚園とつながり、そして友だち同士で遊べるというのは望ましい良いことだと思います。更に年齢によって無理がなければ、かるた遊びをすることから発展してかるたの共同製作をして遊んだり、トランプ遊びをしたりするのも楽しいゲーム遊びでしょう。また、風のある日に凧をつくって凧上げ大会をしたりするのも三学期らしい嬉しい遊びの一つです。

こうした日本古来からの伝統的なお正月の遊びを教材として取り入れていき、自然に遊びの中で体験し、味わっていくことは、遊びを拡げるだけでなく、そこには日本人としての意味深いものもあると思います。

また寒い冬の朝も元気に戸外に飛び出した子ども達は、霜柱を見ついたり、貯水槽に氷が張っているのを発見して、喚声を上げたりしています。そして更に雪が降って積もったりした日には、雪だるまづくりや雪合戦など雪遊びに夢中な一日が持てます。こうした冬の季節の遊びは自然からの贈り物であり、自然からの恩恵を充分味わっていくとともに、一方では冬の寒さや、厳しさなどを知ったりすることも大切な経験となります。このような体験をしながら、社会や、自然への関心を拡げていったりするのも、三学期らしいあそびの特徴とも言えると思います。

子どもたちの様子は、こうした新しい遊びをど



んどん取り入れていく吸収力が充分備わっています。そしてまわりのことに関心を持ち、自分も積極的に参加してやってみようという気持ちも伸びてきています。大勢で遊ぶ楽しさがわかってきたり、いろいろな遊びを組みたてたり、ルールを理解して遊ぶようになるというの大きな育ちと言えると思います。また友だちとかかわりが深くなってきた、相手の良さを認めたり、友だちの言うことをよく受け入れたり出来るようになるとともに、自分自身も友だちの中で自己発揮すること

とも次第に出来るように育っています。こうした子ども同士の関係を見守りながら、子どもが考えたことが実現出来るように必要な材料などを用意したり、手助けしたりしながら、遊びが長続きしてじつくりと遊び込めるように配慮していきたいと思います。また更に保育者としては、子ども同士の関係がより深く育つように心を配るとともに、子どもの自分からやろうとする気持ちを大

切にし、子どものやり出したことが充分行えるような経過時間の保障をすることも大切です。こうした心づかいや励ましの言葉、そして援助などによって、日常生活の中で子どもたちが満足感や達成感を持てるようにしていきたいと思います。

また一方で、身のまわりのことや生活習慣上のことは、新しい学期を迎えたこの時期、そして今年度の最後の学期としての三学期には、一人ひとりの子どもの中にどれだけ身についたものとなっているかを見直してみることも必要です。自分の持ち物や遊びに使った遊具や教材などを定まった場所に片づけることなどが習慣として定着出来るようになっていくとか、用具や材料などを大切に扱うことが出来るようになっていくかなどを再確認し、まだ身につけていないものがあれば促しながら進めていくようにしたいと思います。殊に三歳児などでは、冬の時期の身のまわりの仕度としてオーバーや手袋等のぬぎ着などもありま

す。また一人では出来ない部分は保育者は手をかしながらも、少しずつ自分でやるように励まし、促していくことも大切です。

三学期は寒い季節のことであり、室内での生活がどうしても多くなりがちですが、遊びが単調にならないようにとの配慮も必要です。新しい材料を用意することとか、遊具の配置がえを行ってみたりすることで、刺激となつて新しい遊びの展開が見られたりする場合があります。またグループでの遊びが多くなると、ごっこ遊びが盛んになり、役割をとつて遊ぶことも多くなつてきます。役割の取り決め方とか、遊びの構成などに、グループのみな意見が反映されていくように、遊びと一緒に参加したりしながら、友だち関係によく留意していくことも大切です。

そして友だち関係も比較的円滑に育ち、級の中

に少し落ちつきやゆとりも感じられるようになってきたこの時期には、子どもたちの心の中により豊かな情感を育て、情操陶冶をはかつていく上で、よいお話を聞かせたり、絵本を読んだり、よい音楽を聴かせたりする機会などを多く持つようにしていくことも大事なことと言えるでしょう。そういった教材面の準備や配慮などを多くして、級の中によい雰囲気をつくり、子どもの心が感性のある豊かな情緒を持ったものへと育っていくようにと願いたいものです。

このような教師としての努力や、心配りは、級の子どもたちに大きく影響してくるものがあります。三学期はいろいろな面で、年齢にふさわしく、一層の充実した日々が持てるようにありたいと考えています。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

幼児の笑いとその保育における意味(1)

一 歳 児 の 笑 い

友 定 啓 子



はじめに

保育の中で、「笑い」は特別な位置を占めているように思う。子どもの表情から笑いが失われると、不安定なものではないかと心配になるし、反対に子どもたちが保育者の行為に笑顔でこたえてくれると安心する。時には保育者自身が子どもに笑顔を向けられず苦悩することもある。このように「笑い」はその子自身の状態や子どもと保育者あるいは子ども同士の関係のひとつの指標であることを私たちは直感的にとらえている。

また、発達とともに子ども自身の中で「笑い」の意味が豊かに広がっていく。新生児の生理的微笑から始まって、年長児では他者を笑うことを知り、また笑うことによって自分の失敗を乗り越えていくなど、成人に近い笑いの機能を獲得するに至る。私は、乳幼児期においてこの「笑い」がどのように変化発達していくか、笑いは子

どもにとつてどんな意味を持っているのか、さらにその保育における意味を明らかにしたいと考えた。

その発達変化のようすを追うために、保育所のクラスにこの数年間参加観察のために定期的に通い続けた。一九八五年から一九九一年までの六年間である。原則として毎週一回午前中のみで観察総日数は二〇九日であった。対象になった子どもは一九八五年度に一歳児クラスであった一四名である。その子どもたちが卒園するまで観察を継続したが、その間園児数の増減があり最終的にはのべ三三名になった。このなかで五年間観察を続けた子どもが一一名、四年間の子が三名、三年が六名、三年未満が一〇名である。その後一九九〇年度の〇歳児のクラス一四名の追加観察をした。

観察記録の中から「笑い」に関連する記録を取りだし整理・考察を加えた。その時に「笑い」として取り上げたものは、声を出して笑う・ほほえむなどを初めとして自然に子どもを見ていて「笑った」と思えるものを取り上げている。満足の表情、得意の表情、恥ずかしさの表

情なども含めることにした。考察はどんな状況で笑いが起きているかを中心に行った。

この連載ではまず一歳児からスタートして五歳児までいき、最後にまた〇歳児にもどることにさせていただきたい。そして、ここでは特に子どもにとっての意味、保育における意味について考えていきたいと思っている。

一、笑いの三つのレベル

一歳児で見られた笑いを大別すると次の三つである。

第一は、生理感覚的快あるいは緊張に伴うもので触覚と運動感覚が大部分を占めている。第二は、認識作用に伴うもので、未知の体験を受容する際に生ずるものである。第三は、他者との交流に関連したもので、親しみの表現としての笑いである。第一の笑いを身体レベルの笑い、第二を認識レベルの笑い、第三を社会レベルの笑い⁽¹⁾と名づけることにする。

二、身体と笑い

身体レベルの笑いとは、くすぐり合いや冷たい水に触れたときにはじけるような笑いのように直接身体に関連したものである。また、歩く、走る、すべり台からすべり下りなどの運動に伴って生じる笑いである。これらの笑いは運動による緊張や感覚的緊張の解消という作用を持っている。ただこれは単なる生理的快感とはいえない面を持っていて、同じ冷たい水のなかに入っても、おびえて立ちつくす人もいれば、歓声をあげてはしゃぎ回る人もいる。その子がそれを受容しているかどうかということに影響を受けていると思われる。

一歳児に限らず、水遊びや泥遊びなどを十分に楽しむようになった後、いろいろなことに自信を持って取り組むようになったという幼児の姿がよく見られる。これはその子なりに、自分の身体に対する理解や自信を持っていたということに関連していると思われる。

三、「わかる」ということ

認識レベルの笑いとは、一言でいえば「理解」に伴う



笑いである。何かがわかることがうれしいのである。

△記録Ⅰ▽

キャラクターシールをはがして画用紙に貼るという活動をする。M子、台紙からシールをはがせない。私のはがしてもたせるが、のりのついた面を上に向けたまま貼ろうとするので、指にくっついたままで貼ることができない。それでも、指を何度か動かしているうちに偶然シールが裏返ってくっつく。それを何度か繰り返す。いっこうにスピードが上がりたので、私はM子の目の前でゆっくりシールをひっくりかえして貼るという動作をして見せた。M子はそれを見てニコツとはほえむ。次から間違えなくまるでこんなことはじめから知っていたというふうに貼りつけていく。

(一九八五・一二・一九)

私はこのM子のほほえみが印象深かった。「腑に落ちた」という感じがしたのである。それまで混乱し困惑していたところへ、一つの枠組が与えられて自分のするこ

とがあきらかになったのではないかと思う。

林竹二は『教育の根底にあるもの』の中で次のような中学校の実践例を報告している。⁽²⁾「彼の教室に、算数の最も不得手な佐藤君というのがいて、角と角の関係についての理解がどうしてもできないでいるんです。△中略▽それで、きょうの時間は佐藤の時間にしてやろうというので、徹底的に佐藤君にかかわり続けたんですね。

いろいろに問題を出し、答を吟味して、やっていくうちに、佐藤君がある瞬間にこつと笑ったんです。そのにこつと笑ったあと書いた字がこちらです。それから、そのにこつと笑う前に書いた字がこれです。これは同じ時間の中のことだそうです。だから、そういうふうに、ああこうだったのかということが腑に落ちる、これでやっとなに字までを変えてしまうわけですね。これは算数であるだけに非常に貴重な証拠に思いますね。」

私たち大人も何かがわかったときうれしい。「わかった!」と感じたとき、きつと笑顔が出ているのだろうと

思う。一歳児はこの世に出てきて間もない。わからないこと、未知のことだらけである。意味がとれないことが多くあるにちがいない。そんなふうにと考えると、次の三つの記録も納得できる。

△記録2▽

先生が、テーブルについた子どもたちの前に、ハンドバッグの中からシャボン玉液を取り出して、目の前でふくらませて見せる。ところが、みんなきょとんとしている。何回かふくらませてしばらくしてからようやく、さわるうと手を差し出す子が出てくる。偶然一人の子どもの手に触れてシャボン玉が消えた。子どもたちは何が起こったかわからないような顔をしている。

(一九八五・五・一七)

△記録3▽

その三〇分後、裏門に集合した子どもたちが後から来る子のを待っている間、私はシャボン玉を吹いて見せた。それを見てC子が興奮したように笑う。女兒L子、M子などがスト

ローの先をみつめて、ふくらんで出てくるシャボン玉に手を出す。

(一九八五・五・一七)

次の記録はこの約一カ月後である。

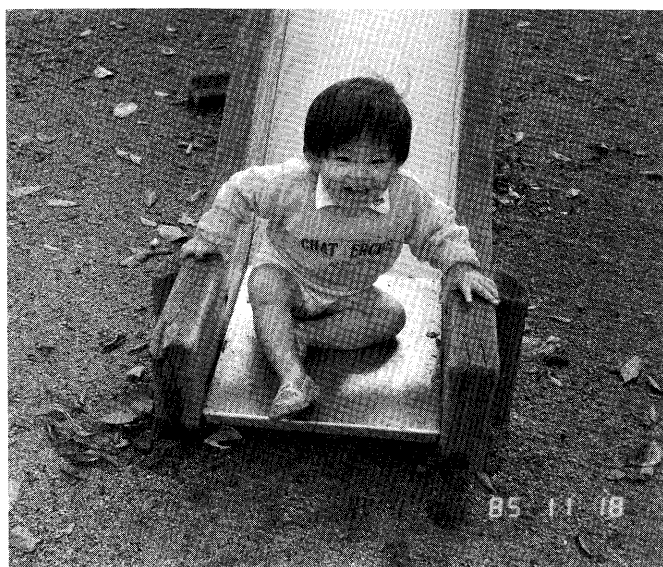
△記録4▽

先生はまたシャボン玉を取り出してやって見せた。このときはすぐに「もっかい! もっかい! (もう一回)」と叫び声が出て「ワアーツ、ワアーツ」と大歓声。シャボン玉がストローの先から始めると、一心に見つめている。その後、両手を差し出してつかもうとする子、立ち上がってほーっと見つめる子、椅子に座ったまま首だけ上方を見つめている子など様々であった。シャボン玉の動きを見て「あ(お)ちた」という言葉も出る。D子は両手を重ねて差し出し「ちょうだい、ちょうだい」という。

(一九八五・六・二八)

子どもなりに、これから起こることがわかったとき、安定してその体験を楽しむことができるのであろう。

ただ、その「わかる」というのは、決して大人の思う



ような「理解」ではなく、前言語的な理解であると思われる。例えばすべり台をすべる時、ある子どもはすべり下りる前にここにこしている。ところが別の子どもはすべり下りる前は真剣そのもので、すべり終わってにつこり笑う。前者のほうが熟達している子どもである。これも一つの「理解」があるかどうかに関連している。この場合は運動感覚的な理解であらうし、大丈夫といった安心感のようなものでもあらう。シールはりの場合は「こうすればこうなる」という壮途的なものであるし、あいさつなどにつこりできるかどうかは「この人は知っている人」という認知のようなもので名前や関係を理解しているとは限らない。

そうなると、保育として考えておきたいことは、この前言語的な「わかる」という体験を大事にしていくなことである。私は初めのシャボン玉の記録では保育として失敗ではないかと思った。子どもたちが受け入れてくれたように思えなかったからである。しかし、その後の記録を見ればこれは必要な体験だったということがわかる。

四、他者を受け入れる

一歳児で大事にしたいことのもうひとつは、笑顔がことばを持たない彼らの重要な自己表現の手段であるということである。ここでは他者との交流を社会レベルの笑いとして考えているが、これは年齢が上がるにつれて、明確な自己認識や他者認識、それに集団認識というものにつながっていくからである。一歳児ではその中でも、他者を受け入れることが主要なテーマである。子どもは自分の周りにいる人に気付き始める。その人々が次々と自分にかかわってくる。見知らぬ人であれば警戒するし、よく知っている人であれば笑顔で受け入れる。自分からも親しみをよせていこうとするが、まだ相手の状況はわからない。しかしその中で彼らなりに着実に周りの人を知っていく。まずは大人、そして友達である。

△記録5▽

初めてクラスに入った日。B男は私に関心を示して、じっと見つめる。

(一九八五・五・一七)

△記録6▽

部屋に入っていくと、三、四人の子が寄ってくる。A男、私に抱きつきニコーとする。D男「あよ、あよ」(おはよう)。M子「うわあ」。B子、遠慮がちに体を引いてにこーと笑う。

(一九八五・五・二八)

△記録7▽

給食時、C男がM子の顔を両手にはさんで自分の方へ向け、正面を合わせてニッと笑いかける。M子の方は興味も示さず、全く気も使わず、すぐ顔をもとに戻す。再びC男が両手でM子の顔をぎゅっとはさんで自分のほうへ向け、顔をのぞき込みニッと笑いかける。どうも自分の方を向いてもらいたいらしいが通じない。

(一九八五・五・二二)

△記録8▽

いすの列車の中で、前後に乗り合わせたC男とL子。C男が突然ふりむいて、L子を笑わせる。ふりむくたびにL子が笑うので、C男が何度もくり返す。

(一九八五・一〇・四)

△記録9▽

E男、A子をくすぐって笑わせようとする。

(一九八六・三・二二)

これらの記録にはことがほとんどない。気持ちを表す言葉はまだ持っていないのである。かれらは他者に対する親しみの表現は笑顔に勝るものはないと思っているかのようなのである。

五、言葉と笑顔

F子は言葉が遅れていると先生方が心配されていた。その時F子は一歳九か月だったが、単語も出ていなかった。しかし私はそんなに心配はいらないのではないかと思っていた。というのは、この子は笑顔でやりとりができるのである。私はこの子の相手をするとき、言葉がないので困ったということはほとんどなく、言われてはじめてそういえば聞いたことがないと気がつくほどだった。

△記録10▽

F子とボール遊び。F子、にこにこしてサッカーボールを私に持ってくる。ボールのやり取りはできない。私は「F子」と声をかけて、ボールをころころ転がしてやり、F子に持ってくるように言う。するとF子はボールの後を一生懸命に走って、ボールに追いつき抱きかかえ、ニコニコ笑って私のところへ持ってくる。私は受け取りまた転がしてやり、それを追いかけてF子が走り、抱きかかえニコニコと持ってくるということを繰り返す。少しずつ変化をつけて繰り返していたが、そのうちに転がしてやったボールを別の子どもに取られてしまった。どうするかと思いつながら待っていると、F子はしばらくして、別の落ちていた破れボールを抱えて、ニコニコとうれしそうに私のところへ持ってきて差し出した。

(一九八五・一〇・二一)

△記録11▽

F子、隣のB子の顔をのぞき込んで、ニコニコニコと笑いかける。顔中で笑って両手をB子に差し出している。声

はない。

おやつが欲しいとき手を差し出す。大人が「ちょうだい」と教え、言うように誘いかけるが、本人の方は声が出ない。

最後に手を上げて、「うー」。

(一九八五・一一・一八)

翌年の二月になって声が出た。二歳一か月である。そしてその言葉は、「せんせー!」であった。しっかりと感情の込められた言葉だった。私はびっくりしてしまった。担任の先生に聞くと最近はつきりと言うとのことであつた。その後のこの子の言葉には、私は感心させられることが多かった。四歳のときに、給食当番の子どもが食器を運ぶのに片手でやっているのを見て、「両手にし(なさい)」と落ち着いて相手の立場になって声をかけていた。

言葉は相手に話しかけるためにある。ただ自分の用事だけを言えばよいのではない。この子が言葉を持たなかったとき、相手の心に直接笑顔で話しかけていた姿が思い起こされる。早くから言葉を得ると、気持ちが言葉

に吸収されてしまうような気がする。用件は伝わるだろうけれど、気持ちはかげに隠れてしまうような気がする。彼らの精いっぱいの他者に向けられた笑顔にはぜひ心からこたえてやりたいと思う。

(山口大学教育学部助教授)

引用文献

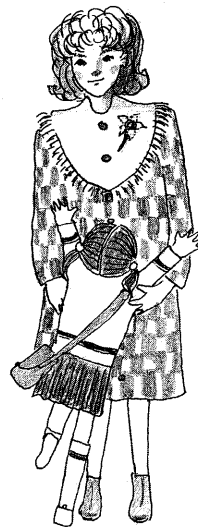
- (1) 友定啓子「一歳児の笑いと保育」『保育学年報一九八六年版』日本保育学会、フレーベル館 一九八六
- (2) 林竹二『教育の根底にあるもの』径書房 一九八四

二歳児との出会い

守 永 英 子

ここ一年ばかり、二歳児との触れ合いの機会をもつようになった。二歳前後から三歳までの子どもたち十五人のグループである。週一回、一時間半ほどであり、同じ子どもたちとは、たった九回の触れ合いであるから、浅く短いものである。

長い間、幼稚園に在職していた関係で、三歳から就学前までの子どもたちとは、かなりなかかわりをもった。しかし、それ以前の、より幼い子どもたちが、どのような時期を過ごしてくるのか、かねてから、大変関心のあるところであった。僅かな触れ合いの機会であるが、幼い子どもたちは、いろいろな姿を、かい間見せてくれ、いっそうの関心をそそられている。



幼稚園の子どもたちにも、しばしば感じられたことであるが、幼い子どもたちの内にも、一個の人間としての誇りを守ろうとする断乎たる姿勢が、ひそんでいるように思われる。大人の一方的な押しつけをはねのけて、大人に屈せずに関心を守ろうとするこの力は、大人にとっては、しばしば「素直でない」「言うことをきかない」などと、マイナスに受けとめられやすいが、子どもを「一個の人間」として成長させていく、子どもの「内なる力」の一つの側面のようなものである。二歳児を見てみると、このことが強く感じられる。

H子は、二歳四か月で、この二歳児グループに参加してきた。時どき、他の子どもにかみつくこと以外は、これといって、目立つ子どもではない。言葉による表現の、まだ少ない年齢の子どもたちであるから、たいたたり、かみついたり、行動に訴えることは、よくあったけれど、H子のかみつく頻度は多かった。

グループ全員の子どもたちに、紙芝居を見せようとしたとき、三、四人の子どもたちが、席を立て、紙芝居のすぐ近くまできて、見ようとした。それぞれが、より近づこうとして、お互いに多少のけん制はあったものの、大きなトラブルにはならず、「よかった」と思った矢先、H子が隣の男の子にかみついた。そばにいた大人たちは、そのとき、誰も、H子がかみつくとはい、予想できなかった。子どもたちのいざこざがおさまって、皆が紙芝居を見はじめた、と思える状況であった。何故H子は、かみついたのであろうか。H子のテリトリーをA男が侵したとでもいうのであろうか。幼い子どもの行動には、大人の理解しにくいものがある。

H子が、B男にかみつき、B男が、母親のところに泣いて行つたときも、あつという間の出来ごとであつた。状況がよくのみこめないまま、泣いているB男と母親に対して、そして又、「かみついた」H子に対して、そばに居合せた大人としては、何もしないわけにはいかなかった。

「B男ちゃんに、＂ごめんなさい＂をしてきましょうよ」と、H子に手をさしのべてみたが、H子は拒絶して、身を引いた。H子には、H子なりの、かみついた理由があるともいふかのようであつた。

「でも、B男ちゃん、＂痛い＂ って泣いているわ。＂大丈夫？＂ って聞いてあげなければ」

今度は、思いがけず、H子の反応は素直であつた。

自分が「＂ごめんなさい＂ といつて謝るのは、自分が悪かつたと承認することであり、H子にとっては、受け入れられない。しかし、自分がかみついた相手が、母親に抱かれて、激しく泣いていることは気になる。といったH子の状況に、＂大丈夫？＂ と聞いてあげようという提案は、うまく適合したのかもしれない。

H子は、自分から手をさしのべ、私と手をつないでB男に近づいた。

「痛かつたでしょう。大丈夫ですか？」と尋ねる私に、B男の母親は「もう大丈夫です」と答えてくれた。H子が、私と一緒にきて、B男の様子を気遣う素振りをを見せてくれたことで、私もほっとし、H子に代わって、「痛かつたでしょう。かみついて、ごめんな

さいね」と詫びた。

すると、驚いたことに、続いて、H子が、「ごめんなさい」と、はっきりあやまったのである。

私が促したのではなく、H子の、自分から出た言葉であった。静かな感動が、胸の内にひろがり、H子へのいとさが、こみあげてきた。

子どもの心の動きは微妙であり、大人の働きかけの僅かな違いで、気持ちの流れが変わる。大人の権威を強めることで、子どもに言うことをきかせるのではなく、大人が、子どもに対して、こうあってほしいと願う方向を、子どもの自然な気持ちの流れと、うまく擦り合わせる工夫が大切であらう。

二歳児をもつ母親は、子どもが、我を張って、言うことをきかなくなった、扱いにくくなった、と悩むことが、間々あるようであるが、このときをどのように過ごし、子どもにとって、どのような経験をするかが、次の時期の子どもの姿に、大きく影響を残していくことを思うとき、この時期に一層の興味を覚えるのである。

(元お茶の水女子大学附属幼稚園)

雪 兔

ゝ 輪 かんじきとスキー 〃

皆川 美恵子

盛夏生まれゆえでしょうか、夏の対極にある冬の寒さは苦手です。もの心がつき始めた幼い頃、東京にも記録的な大雪が降ったことがあります。濡れ縁に積もった雪を手で持ち遊んだのが、ゆきの感触の初体験だったように思います。母は若く、南天の実を探してきて華やきながら雪兔を作ってくれました。この雪の日の記憶は、兔の目の赤さのように今もって鮮やかでなりません。

アレルギー体質で蕁麻疹に悩まされるようになってから、生命が芽ぶく春から初夏の季節も苦手となってしまいました。チンク油で真っ白になって、独りふくれ面をしていたものです。そして冬の日を迎えると、冷え症、低血圧で身体が凍え始めます。厚手の靴下、毛糸のパンツをもぞもぞ身につけ、着ぶくれた不格好な少女時代を送りました。

健やかな従姉妹たちの中にあって、アレルギー体質はわがままな性格の子がなりやすいと囁かれました。身体の冷えは、湯たんぽから電気毛布、そして電気敷布へと温もりの恩恵を変えながら、それでもどうにか大人となりました。

「養生に志あらん人は心に常に主あるべし」

——この言葉にいたく心が触れたことがあります。医者まかせて薬にたよって対処療法を行ない、その場を凌いでも健康にはなれないことはわかっていました。親が守ってはくれないことも。

私の人生なので、私が主人公となって自身の身体を積極的に健やかな方向に舵取りをしていかなくてもならないのです。でも一体、その健やかさの方向はどこなのでしょう。

やがて漠然とですが、季節の方向性に舵を取ることでないかと思えてきました。今まで季節の振り子についてゆけず、季節のリズムには調子つ

ばずれて、その時の気分の、気の強さだけで生活にアクセントをつけてきたようなところがあります。自然の打ち出すリズムに耳を澄ましたことがなかったのですが、季節はひそかに秘密の音を立てて廻っているようです。

ある時、私に、スキーをしてみませんかと言う人が現れました。そして何と、寒がり屋で、雪は窓から眺めるものと思っていた私が、ゲレンデにスキーをつけて立つという信じられないことが起こったのです。

猪谷六合雄（イガヤ・クニヲ 一八九〇—一九八六）、この人物をもし知ることがなかったなら、私はスキーに興味をおぼえなかったかもしれません。猪谷のスキーに生きた人生、猪谷の人々になり薫陶を受けたスキー・スクールの人々によって、私は雪の世界に誘われたのです。

日本にスキーが伝えられたのは一九一一年、

オーストリアのレルヒ少佐によってでした。越後

の高田師団で彼は日本の若き将校たちにスキーを教えたのです。猪谷はその三年後に、栗の木で手製スキーを削り出し制作し、スキーの滑走にすでに挑戦しているのです。猪谷はスキーを知る前に、藁ぐつに輪かんじきをつけて雪山を歩き廻っていました。ところがある日、赤城山で二本のシブールを見つけて何の跡か驚きました。二本の線の間が等間隔ならソリですが、そうではありません。不思議でならずその跡を付けていったところ、ある家の前にたどりつき、戸口に二本の長い板が立てかけられてあったといいます。猪谷とスキーの出会いでした。

日本では雪中歩行の用具としてスキーは発明されませんでした。輪かんじきが工夫され使われていたのです。朝鮮半島北部や樺太では、スキーが生み出されていますから、雪質の違いが輪かんじ

きとスキーを分けたのでしょう。

太宰治は『津軽』の冒頭において、「こな雪、つぶ雪、わた雪、みづ雪、かた雪、ざらめ雪、こほり雪」と、雪の名をあげています。このうち、水分の少ない、「こな雪」は、山里に降ることが少なく、水分が多い重い雪、その雪が凍ったものがほとんどだったと思われます。雪玉、雪だるま、そして雪兔を作る重い雪の中を移動するのは、輪かんじきが適していました。スキーにとっては、こな雪こそが最適なのです。

『北越雪譜』を見ると、越後塩沢での子どもの雪遊びが紹介されています。それは「雪ン堂」という遊びで、今、秋田に残っているカマクラとそっくりな、雪で固めた洞に子どもが神をまつり、煮たきをして過ごすというものです。大雪の地方では、雪中を子どもが移動することは遊びとならず、城という聖域を築き、お籠りこもりをすること

が古くからの遊びであったわけですから。

一九一一年から一九九一年と、昨年は日本にスキーが伝えられて八十年という記念すべき年でした。ワックスやスキー用具の改良、そして滑走技術の究明により、あらゆる雪質でのスキーが楽しめるようになりました。日本の野も山も川も、雪が降ることによって「雪わたり」という秘儀が可能となったのです。白銀の世界に隠された大地の凸凹を、足裏でなめらかに滑ることは、地球という天体の曲面を愛撫するような感動と興奮があります。冷え症の私は身も心も陽気になって熱を発し、雪の湿り気でノドもヒフも潤いを帯び、深く息づくことができます。雪の世界こそが、生命の蘇る原点のような気がしてくるのです。

猪谷六合雄は、季節は円運動を繰り返していると言います。冬は円の底であって季節の重心だということです。でも冬はいつまでも底に停止してば

かりません。やがて何かの力が湧き出して春へと上昇を開始します。

雪兔はシンとうずくまるだけではなく、雪原にいや天空にジャンプします。地球の重力を恩寵としたスキーの遊びは、八十年前の日本の子どもには聴くことのできなかった冬の季節の音を、そっと知らせるのです。

(十文字学園女子短期大学)



養護施設に於ける

虐待児の入所事例

藤野 泉

△はじめに▽

一九四八年児童福祉法制定によって、第一種児童福祉施設として養護施設は、「保護者のない児童、虐待されている児童その他環境上養護を要する児童を入所させてこれを養護することを目的とする」(児童福祉法3章41条)と定義されているが、その初期には、戦災孤児、戦争遺児などを含む「保護者のない児童」を多く擁して、

その家庭に代わる養育の場としての役割を果たしてきた。

その後わが国の経済成長の途上にあつて、崩壊家庭の犠牲になった児童の入所が急増していった。母家出、父行方不明、父親の酒乱も入所理由としては「養育困難」であつた。

一九七〇年代頃から入所理由の殆どをしめる「養育困

難」の実情は、両親の長期療養であるとか、貧困などのやむを得ないものではなく、事情は何であれ、親の「養育放棄」或いは「養育拒否」に他ならない状況であった。これは十分にネグレクト（保護の怠慢ないし拒否）としての虐待と思われる。

入所理由に「虐待」となっているケースは「身体的虐待」であるが、これに加え「里親不調」という複雑な新しい虐待ケースが近年増えている。「里親不調」は、幼児期に里子として縁組をし、小学校高学年になって里親が解除を申し出たという場合で、児童は長期間の人間関係の軋轢を体験し、そして再度の拒否を受けて入所して来ることになる。児童の殆どは、身の上におきてくる事柄の事情も理解できず、訳の分からない不安、おびえなどうつ状態になっていることが多い。

こうしてみると、賑やかに明るく子供達が日常生活を展開させている集団としての養護施設の実態は、様々な意味での「虐待」を幼い身に受けた子供達それぞれの安定の場、回復の場、そして、再起する勇気を養う場とし

ての役割を基本的に持っている訳である。

それには、もう一度新しく出会った大人との信頼関係なしには、またその傷の深さに対応する専門性なしには、ひとりひとりの深手の傷と損なわれた人格を回復させることは、不可能だと痛感している。

当施設は最も小規模な養護施設（定員三十名）であるが、現在、様々な問題を解決しようとして、生活している「被虐待児童」の中から幾つか例をあげてみたい。

尚、以下の主訴、入所理由は児童相談所の児童票から、また現状、処遇方針等は施設での記録をそれぞれ要約して引用した。

△事例▽

…身体的虐待の例…

- (1) 幼児（入所時） 三歳二か月 男児

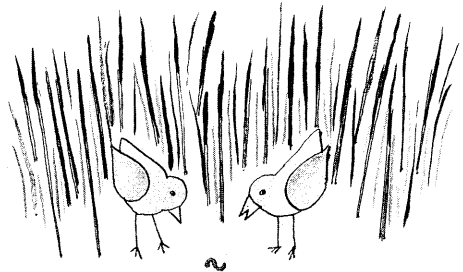
主訴「母が同棲中の男性（三十四歳）が、本児に暴力を振るい、身体に生傷が絶えず危険な状態なので、一時保護してほしい。内夫と離れ、母子で生活したいが、母子が共に生活

しては内夫の報復が恐ろしいので、子供だけ施設に預けた
い。」

この幼児の場合は、母親の申出に至る以前に、保育所で
保母が幼児の身体に傷が絶えず、それがエスカレート
していく現状に対応し、子供を抱えて病院にかけこんだ
ことが「虐待」の発見になったのである。指の爪がはが
されている、前歯が折れている等の状態に医師は「この
儘では生命も危険である」と「被虐待」の判断をし、問
題は児童相談所に移行した。保育所でも子供の傷につい
て何度か母親に事情を尋ねたが、はつきりとした答えが
得られず「階段から落ちた…」などと言っていたよう
である。

子供は病院に連れて行った日、保母の家に泊まって以
来は母親のもとに近寄らず、相談所に行く車にも母親と
一緒ではどうしても乗らず、保母が膝にのせてやっと
乗った状態であった。

(現状)



現在では五歳になり、幼稚園に通っている。見るから
に華奢で可愛い子供であり、人気者として元気に生
活しているが、対人関係には、敏感な、複雑な内面を持
ち続けている。施設の保母に対する甘えにも独占欲が強
く、わざと背を向ける、暴力的になるなど素直に表現出

来ない屈折した愛情欲求の強さを感じさせる。

母親からは最近連絡があり、内夫との生活のストレスで心臓を悪くし、円形脱毛症にもなり、何とか家を出たいと助力を求めている。

(処遇の方針)

幼い中に、鋭敏な理解力や頑固な面を強く持つており、これは大人との異常な環境のなかで養われたものであると思われる。電車で外出する時「帰って来るよね」と必ず問うし、大人を追う様子にも未だ怯えが残っているが、バランスのとれた愛情関係の持続の中で、先ず安定した日常生活体験を基本としたい。不安を取り除きながら、子供らしい開放された生活や遊びの中で、持つている理解力などを健康的に伸ばしてゆきたい。

母親にも、ケースワーク的関わりが必要と思われる。

安心して相談出来る関係をつくり、何とか自立出来るように、一つ一つのこと可能な援助を続けなければならぬ。現状では「母親引き取り」は、まだまだ先のことであり、面会も当分は無理と思われる。

(2) 中学三年（入所時） 十五歳 男児

主訴「小学四年生の時に実父母の離婚により養父母が引き取った。それまで放任されていたので敵しくつけていたが、金銭持ち出し、家出が続き、家庭での養育は限界であるとの訴えなので調査したところ、被虐待児であることが判明した。」

右記が入所理由であったが、児童相談所の調査では、養父母の体罰は引き取り間もなくから始まっており、小学生の時にも虐待の通報が入ったことがある。特に養育の中心である養母からの虐待は日常的になっていたようである（殴る、蹴る、タオルや紐で首をしめる、木刀で頭を殴ったり、包丁を突きつけたりしている）。子供の首には爪でついたと思われる疵痕が残っており、背中にも多数の傷がある。

子供から養父母に反抗することは全くなく、反抗出来ずに中学生になってから家出を繰り返し、友達の鞆から金銭を持ち出し、ゲームセンターの遊びや食費などにあ

てていた。三度目の家出は一か月間になり、野宿している所を保護され養父母に連絡されたが、子供は帰宅を拒否し、養父母も養育の限界と児童相談所に申し出たという経過である。

中学では、小学校から被虐待児との申し送りを受けており、団地の階下の主婦から悲鳴が聞こえると通報が寄せられていたというが、養父母の言い分で事件にならなかったようである。

(現状)

まだ入所もないが、重く暗かった表情が明るくなり子供仲間や大人に対する親しみも出て生活している。

大人に対しては最初は緊張もあり、ちょっとした声掛けにもびくつとしていたこともあったが、持病の喘息の検査の為、病院に通ったり、高校進学のことと転校したての中学に相談に出掛けたりの中で、警戒を解いていったようである。最近では「二〇〇〇ピースのジグソーゲームが欲しい」などねだって買ってもらい、出来上がりを見せ歩いたりしている。

(処遇の方針)

現状では養父母との関係の修復は難しく、家庭復帰は不可能である。まだすっかり心を開く状態にはなっていない。手探りの部分も多くあるが、新しい生活の体験の積み重ねの中で、安心した自己表現が出来るよう大人の側での連続した暖かい関わりが必要である。

受験勉強も強制を感じさせずに協力する機会をつくり、安定と自信を増しながら高校進学を成功させたい。

そのことが近い社会復帰への希望につながるようになり、願ひ、伸び伸びした生活で信頼関係を深めながら安定した帰属感を育てなければならない。

…心理的虐待の例…

(1) 小学五年 (入所時) 十歳 男児

主訴「家に帰りがたらず、夜道を徘徊する。養育に苦慮している」

実情は、実母がこの子を連れて再婚した養父が、宗教

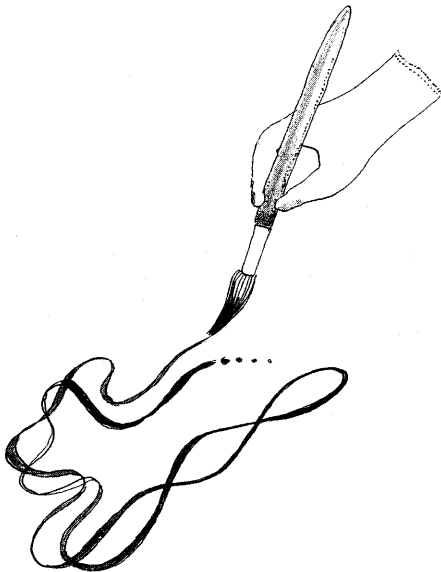
家で占いを職業としており、子供の教育、監護について独特な哲学を持っていて、学校教育に対しても強い不信を持っている。また近隣の人達とも付き合わず、子供を巻き添えにしながら閉鎖的に暮らしている。子供を登校させず、勉強は家庭で特訓し、従わないと折檻していた。子供が帰宅せず徘徊し警察に保護されても、本人に帰宅する意志が無いのならば引き取りを拒否し、親の責任にされたくない、尻拭いはしたくない等答えている。

家では、「風呂に水を入れ身体を洗う」「うさぎ飛びをさせる」「中腰にさせる」などの体罰を加えていたようである。ついに子供は家を出て行方不明になり、菓子パンなどを万引きしたり、暴走族のグループに助けてもらったり、心身共に疲労しているところを二日後見付け出される。父親、学校担任と共に児童相談所に連れて行かれ施設入所となる。

(現状)

入所当時は、明るく振る舞い、言動もハキハキとしていて得意な切絵を作って見せるなど、良い子らしく努力

していたが、入所後三か月ほど経った現在、大人を追いつけては電車の模型をねだったり、甘えや、頑固で自己中心な面なども出てきている。登校を渋って校門まで送る事が多いが理解力があり、工作に優れていて様々な作



品を作り上げている。ピアノも上手に弾き大人をびっくりさせたりして自分に対する注目、評価を求めている。

(処遇の方針)

まだ大人に甘えまわり、人間関係を確かめている感じもある。過去の家庭環境の体験からの不安感を持ち続けているようである。日常生活の中で時間をかけて、安定した信頼関係に変化させてゆきながら、健康的な学校生活も継続させたい。

養父、実母の状態からも家庭復帰は望めず、持っている能力をバランスある実力に育て、希望や意欲につなげてゆきたい。

(2) 中学一年 (入所時) 十二歳 男児

主訴「養母から本児の動きの鈍さや持続性の無さに対して馬鹿呼ばわりをされ、『うちの子ではない、出ていけ』と言われる。それに対して本児は何を言われても無視し、盗みなどで反抗している。養母はここにきて我慢ができず、養育を強く拒否している。」

という入所理由であった。二歳の時に、乳児院から当時、里親登録をしていた養父母に引き取られ、養子縁組が成立している。その後の養育家庭で養母から、躰相談(幼稚園在園中)、性向相談(小学一年)と、その後も相談は続いており、この子は異常だとか無能だとか激しい言葉を簡単に言うかと思うと、手放せないといい、その都度なだめていた養父も今回は養母に引きずられるように、養育拒否に同意したという事情である。

一時保護所では、動作はゆっくりしており、感情の動きも少なく質問にはなかなか答えない。こうした反応傾向は、小さい頃からの母子関係からつくり上げられたものである。何をしてもし叱責され罵られるという関係の中で、何もしないで(無表情、無感動を装う)、自分を守るといったパターンが出来上がったものと考えられる。家庭の中で会話がないことからコミュニケーション能力が育っておらず考えをまとめてゆく力が弱いとの判定を受けている。

(現状)

入所して一年以上の経過の中で、養母より「お前のような脳味噌の破れた人間は……」など酷い文章の手紙が二度来ている。養母は最初、父親の名前を使っていたので、子供は手紙を見てしまったが、喜怒哀楽をあまり表現しない。

人と一緒に食事が出来ず、転校した中学になじめず不登校の傾向になっている。入所時より痩せてきた事もあり、神経科で受診してもらった。「うつ症状」と診断されている。最近、生活には慣れ好き嫌いもはっきりしていて、伸び伸びして見えるし静かではあるが、仲間との関係も大人への親しみも自然である。しかし内面が分かっていくと複雑さを感じさせる少年である。時々おどけて欲しいものをねだったりもする。学校は週に三日ぐらいしか行けない。

(処遇方針)

養母が訴えているような知的障害はなく、理解能力も情緒的な優しさも持っている。一方、表現や行動に偏りがあり、布団に潜りこんでいたり、ふらふら外出したり

する。神経科へ月一度の通院を続け専門医の協力を得ながら、先ず精神的な安定をはかり、生活の楽しみを体験させたい。養母からは養子縁組解除の申請が出ている。

以上簡単に実情を紹介し例として挙げた四名の子供達はそのそれぞれ入所して間もない。幼児がやっと二年目になったばかりである。日常生活で子供達は、みんな活発で、自己中心的で甘えん坊である。元気に学校に出掛けてゆき、「ただいま」と当たり前のように帰ってくる毎日である。しかし、一人一人が持つ人生体験は、短いけれど我々の想像を超えるものである筈だと膝に乗ってくる子供の重みを支えながら、不思議にも思い、また深い責任を実感するのである。

我々に課せられている困難は沢山ある。その一つが虐待の発見ではないだろうか。言葉でも行動でも充分に表現できない子供達からの訴えは、小さくて届かない。そして辛い月日は容赦なく子供の傷を深くしている。前記の中学三年男児の身体の傷痕は数年かけて刻まれたもの

であるし、里親不調の少年のうつ症状の原因は幼児期からの長い年月の苦しみなのである。

また養護施設の形態は、傷付いた子供たちの真の回復の場になり得るだろうか。逃れてくる子供達に、施設が新しい緊張や重荷を負わせるようなことがあってはならない。一時保護所にいる措置決定の児童には、入所前になどなに遠方の児童相談所であっても、施設長と担当する職員が面会に行き、少しでも不安を軽くしようとしている。自分が待たれていて、大事にされているのだと感じることから大人との関係が始まるのである。

施設は集団生活ではあるが、日課や規則の無い、のびやかな生活を基本にして個別的な処遇に取り組んでいる。しかし、大人の努力も研究も子どもたち個々の健康な回復にはまだまだ足りないのである。

そうした現状にあつて、時々思うことがある。彼らは一体家族というものをどう理解しているのだろうか。自分が潜り抜けてきた過去の生活を幼い心でどう処理しているのだろうか。そして我々他人との生活を。これから

生きていく長い道のりの将来を。

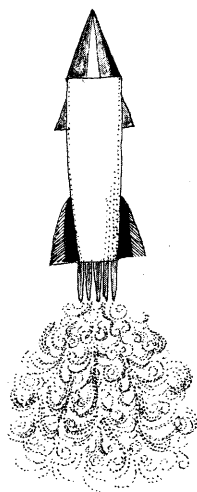
日常生活の中で子供達は、思いまどう我々に、時々思いがけないぐらいの信頼の表現を見せ、面映ゆくさせたりもするのである。考えて見ると、ここにあげた子供たちと、その過去の出来事について語り合い、過酷な体験を共有するなどは、とても出来ないでいることに気付く。私には未だその勇氣も自信もないのだから。彼等との生活は始まったばかりなのだと改めて自覚するのである。

「関係とは、人が、他人といっても自由であり、第三者の面前でも彼自身であることができ、他人も彼のありのままに好意を持ってくれるような、相互理解なのである」(ジセラ・コノブカ著『収容施設のグループワーク』より)

(社会福祉法人 興望館・杏掛学荘)

風のすがた

松井 とし



子どもは風の子。子どもたちの生活の中に、さまざまな風の姿を見ることができ。森林公園の広々とした緑の絨毯の上でたわむれる子どもたちのやわらかな髪に。咲きみだれるタンポポやしろつめくさをつんで歩く子どもの小さな手の先に。鯉のぼりをもって狭い園庭を泳ぎ回る子どもの、ふっくらとしたほっぺたに。

ある時こんなことがあった。陽の当たらない真冬の園庭で数人の子どもたちが両手を宙にのばして何か叫びながら駆け回っている。近づいてみると、砂をまきあげるつむじ風にむかって「風さん、お願いだから幼稚園のお砂を持って行かないで」と話しかけていたのだった。風と遊べることは、子どもであることの証ではないだろうか。

私は風が苦手だ。室内はほこりになるし、喉が弱いので強い風に吹かれると、うがい

励行していても喉を痛めることになってしまう。加えて近年は、花粉を運ぶ春先の風に悩まされている。

しかし、『保育者』としての私は、子どもたちの生活の中になるべく風と遊ぶ機会を多く、と心がけている。紙飛行機や風輪も楽しいが、なんと言っても庄巻は風上げである。この時ばかりは、風の嫌いな私も「風よ吹け吹け」である。一枚のわら半紙を折ってつくる素朴な折り風は年少児向き。子どもが手にしているだけで風に反応してひとりで踊ります。年長児にはビニール風。ビニール袋を切り開き、竹ひごをセロファンテープでとめるだけで、本格的な風の出来上がり。実によく上がる。おもいおもいに絵をかきオリジナルの風が出来上がると、揃って隣の高校のグラウンドへ出かける。初めは、風を自分の背中にしょって走るだけの子どもたち。あっちこっちで糸が絡まって大騒ぎ。私は広いグラウンドを駆け回り「風上げ」の極意を手ほどきしてまわる。じきに子どもたちは、自分の風と対面しながら風を感じ、糸の張り具合を加減しながら風上げを楽しむことができるようになるのだ。いつの間にか、私も子どもたちと一緒にその醍醐味を味わい、楽しんで風の姿を体感している自分に気が付く。

(神奈川県立教育センター)

J・A・コメンスキー T・G・マサリクの 講演から(3)

大 梶 優 子



「チェコに、パラツキーほどりっぱな人物はいないでしょう。彼は、我が民族の歴史を、初めてしかも最もすばらしく書き表しました。また、コメンスキーを大変たかく評価しました。『パラツキー (František Palacký, 1798-1876) は、チェコの最大の歴史学者で、民族復興運動においても指導的な役割を果たした。民族博物館の設立者。コメンスキー研究、コメニオロジーの創始

者。パラツキーのかたわらで、シュトルフは、自分の著作物にコメンスキーへの理解のほどをよく表していますが、最近のものに関しては、あまり採り上げたくありません。と言いますのは、コメンスキーの思想の哲学的な面よりも、むしろ文献学的な面を多く引き出しているのを思い出したくないからです。悲しいことですが、私達のところ、本国では、まだコメンスキーの著作物が出版

されていません。(一八九二年当時)そして、出版される場合も、往々にして全くコメンスキー的ではありません。コメンスキーの意図が配慮されていません。例えば、一八八〇年に教育出版社から再版された『言語の扉』がありますが、これは、一言で言えば、イエズス会の学校で役立つように編集されてしまっているのです。それで、最近コメンスキーについて、多くが教義的な面や政治的な面を強調しているのも不思議とは思えません。コメンスキーには、すでに生存中から考えを異にする人々がいました。彼の弟子の一人(アーノルド)は、コメンスキーの思想の中に無神論的な考えを見付けようとしたほどです。ですから、現在、私達の周りに、コメンスキーの教義的な面や政治的な面だけを好んで採り上げる人々がいたとしても、そうおかしくはありません。

私達にとって、コメンスキーの存在は、このように考えを進めてしめくくってもよければ、以前

よりもずっと意義深いものとなるはずです。私達は、コメンスキーの思想の中で、チェコ同胞教団の哲学ばかりではなく、チェコ民族の哲学、チェコの歴史を識ることが出来ます。私達はそこに、率直で誠実なチェコ人を見いだします。それ以上は不可能と思えるほど善良なチェコ人です。しかも同時に、全人類のために働く人間です。身近な人々のためにはチェコ語で書き、より広い範囲の人々のためにはラテン語で書いています。すでにお話ししましたが、私達の歴史の中では、二つのタイプの仕事が進められました。ターボル派と同胞教団です。両者の考えと行動の方向は、急進的です。私達のターボル派は、急進的です。また、私達のチェコ同胞教団も急進的です。どちらのタイプが良いのか、判断を下すことは、私にはできません。コメンスキーが導いた方法を、私としては選びたい気持ちがありますが、ひたむきで、落ち着いた仕事ぶり。それは、科学的な根拠

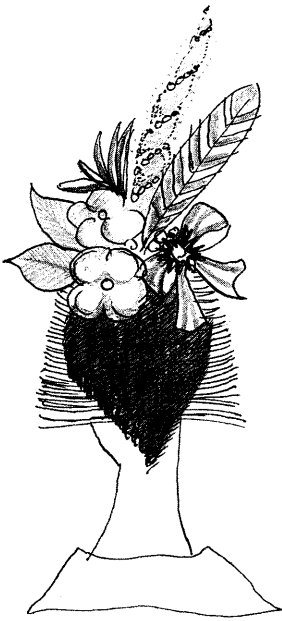
に基く確信の上に進められています。それは、私達の民族、小さな民族のためになされています。それは、大変効果的に進められています。コメンスキーから私達が理解しなければならぬのは、教育は、民族の未来を保証すること、その教育は、道徳に基くものであることです。コメンスキーは、私達に疲れを知らずにひたすら仕事をする例を示しました。これは、私達スラヴ人が伝説の中で高く評価しているような例だと言えます。私達の民族がもちあわせている特性が、コメンスキーのところでも現れています。それは、神秘主義を事実主義の一端で結び付けているということです。これは、チェコ民族の性質というだけではなく、スラヴ民族全体に共通する性質のように私には思えます。コメンスキーを特徴づけているのは、単刀直入に言えば、一方では、理想へ向かう向上心、しいてひたむきな努力といっておきましよう、他方では、現実的な実践力の二つです。

彼の教授学と教育学全体は、人間を例外なく実践的にする仕事を意味しています。つまり、与えられた条件を大きな目標へ向けて活かすように、上手に導いていく仕事です。コメンスキーの思想の中に、チェコ人の精神、スラヴ人の精神がみだされます。民族が何か特別の性質をもつ限り、それが、その民族の未来によいものとして働くように考えます。コメンスキーに依れば、私達に与えられた課題は、自分の民族がもちあわせているもの、それに関心を向けていくことです。それはまた、民族の学校で教え導く教師の課題でもあります。もしコメンスキーが、私達にとって親しみのある教師となるならば、私達は安心し落ち着いて、多くのことをやり遂げるでしょう。ソクラテスがすでに知っていたように、生徒、ここでは民族全体を意味するのですが、その生徒を愛する者だけが教師の役割を担うのです。

それでは、コメンスキーが自分の民族へ向けて

書いた『瀕死の母、同胞教団の遺言』からの言葉で、私の講演を終えることにします。『何よりも先ず』と言っています。『お前、チェコとモラヴィアの民族に向ける。かけがえない宝であるお前に。ローマ帝国の裕福な人々は、自分の遺産を公共のものとして残した。神は、その例を实践することを思い付かれた。お前は、神からの祝福を受け、水あるところに育つ草木のようであれ。苦悩に満ち、苦痛が心身を射ぬき、周囲から無視され嫌悪されようと、自分の腕で肩を支え、弓

を張って留まれ。生きよ、神の恵みを受けた民族よ。死んではならない。お前の民は、数えきれぬほどであれ。私も、神を信ずる。怒りの嵐が過ぎ去り、神のおきてが我々の頭上にかざされる時、政府は、お前達の手にも再び戻るであらう。自分達のことは、自分達で決定できるようになるのだ。神は、お前達のためにヨゼフとイザヤとティモテオをもみい出し、慈悲の時がくれば、自らお前達の支柱となり、先導者となるであらう。アーメン、アーメン。』



講演の結びに引用されている『瀕死の母、同胞教団の遺言』が書かれたのは、三十年戦争が終わって、ウェストファリア条約が締結されたところである。

一六一八年、カトリック派と新教徒派の間の緊張状態で起こった「ブラハの窓外放り出し事件」を発端にして、三十年戦争が始まった。一六二〇年の白山（現在は、プラハ市内）の戦いで、新教徒派が敗れ、新しく公布された法令で、コメンスキーをはじめとする信徒達は、国外亡命をよぎなくされた。一六二九年には、スウェーデンが参戦、カトリック派のハプスブルグ陣営に対抗できる大きな勢力となった。スウェーデン軍は、ブラハも含めてチェコスロヴァキアの各地で戦い、あちこちにその記録が残っている。コメンスキーは、チェコ同胞教団の亡命者達の保護と祖国独立の悲願をスウェーデンに期待した。スウェーデンから依頼された新教科書作成の仕事をひきうけ、代

わりにこれらの二つの援助を願い出た。一六四八年、スウェーデン側の勝利で戦争は終結した。しかし、戦後処理の条約で、チェコ問題は無視される。スウェーデンからの回答も得られない。

このような状態で、『遺言』が書き残された。チェコ民族へ向けて、母国語であるチェコ語で書かれ、民族の独立を未来に託して、それを実現させるための課題を明確に示した。

一九世紀のチェコの民族復興運動は、まさに「遺言」を受けとめるのが可能な状況で展開してきた。文学、演劇、美術、音楽の各分野に及ぶ文化活動、スポーツ、学問、教育、生活のすべての領域で、民族の独自性が強調され、自らの文化遺産の価値を再認識することが活発に行われた。民族博物館が建てられ、民族劇場が建てられた。人々の一人一人の献金によって実現したのである。運動が、人々の日常生活の次元で進められていたといえる。それでコメンスキーも、教育学

者、教育の師としてのみならず、民族の師、民族の指導者として、チェコの人々の間に定着したのだ。

この講演記事の後にある注によれば、一六五〇年の初版には、最後の文はなかったという。一七五七年にベルリンで出版され、一八四八年にプラハでそれが再版された時には、すでに加えられていたようだ。初版草稿のままチェコ語で出版されたのは、一九〇八年になってからで、当時のマサリクはそのことを知らなかったわけである。

T・G・マサリクは、一八九二年三月二八日のコメンスキー生誕記念日に、この講演をしている。一五九二年の生誕から数えて、ちょうど三百年目にあたる。

J・A・コメンスキー生誕三百年記念は、コメンスキーの存在に改めて気付き、チェコ民族の歴史の中で果たした役割を確認する機会になった。

今年、一九九二年は、コメンスキー生誕四百年

記念の年になる。二年前から始まった社会改革の中に、コメンスキーはどのような位置を占めるだろうか？ 世界に開かれた国づくりの運動の中で、「チェコ民族」にこだわらず、「世界」の、すべての人々のコメンスキーになる機会が訪れるかもしれない。楽しみである。

(プラハ在住)

ある日の育児日記から (13) 佐藤 和代



おなかの子は五か月にはいりました。つわりも一段落。でも、まだ体調は思わしくなく、圭と遊ぶ時間も少なくなりがちです。

そんな中で救いなのは、圭のおしゃべりが上達したこと。言葉のやりとりで遊べるし、不満なことがあっても、気持ちを言葉で伝えられる分、落ちつくようです。

近頃は、こんな少ない言葉でよく表現できると感心してばかり。そういう能力は、幼児の方が大人よりずっと上ですね。

私が部屋を出ようとすると「おおかみがくるか

らダメ」。ひとりになるのはこわいの、ということでしょう。急に台所にやってきて「あのね、お母さんがいいのー」と言うときは、ハハア、お父さんに叱られたな、と察知します。「カーンクーク食べる」「カーンクーク? なあに?」「あのね、ガサガサッてね、にゅーにゅー(牛乳)とね…」こんなときの説明は真剣そのもの。「あつ、コーンフレークね!」わかってもらえるとニコニコ顔になります。



当分は、判じ物のようなかわいいおしゃべりが楽しめるそう。他の人には通じなくても、お母さんにはちゃんとわかるのよ、と優越感にひたれるというオマケつきです。

***** 若いお母さんたちへ *****

息子はやっぱり エイリアン

山本みゆき

男の子の母親となって一年余り。「大変だ、大変だ。」
と言ってばかりいたように思います。でも、その中で、
あまり面白いので、誰かに話したいこともたくさんあり
ました。言いたいことをためておくのは、腹ふくるわ
ざなので、この場をかりて、おしゃべりしたいと思いま
す。

☆いつでも初の連続

子どもを映すためにビデオを買うなんて、と内心思っ
ていたのに、生まれてみたら、何のためらいもなく買っ
てしまった。何という親バカ！ でも、すぐになんか変わっ
てしまった。何という子ども。今の姿を記すのは、楽し
い。大人が何年も生きた分くらい決定的な瞬間が、一
日の中にあるのだから。それというのも、本当に子ども

は生活していくことそのものが、初めて出会うことの連続なのだ。初めて立った、歩いたは言うまでもなく、初めて目で追った、初めてカタカタの方向を変えた。初めてふざけた、初めてフォークを使おうとした……等々。

あーこれはすごい進歩、と思っても、あまり些細であまり数多いため、忙しさにまぎれて書きとめずにおいて次の日になると、さあ何だったかわからない。息子はすずしい顔で、そのことはずっとできていたことのようにやっている。このようにして九割九分くらいは消えていってしまうのである。興味の対象も次々と変わる。三か月の頃好きだった「紙のクシャクシャという音」のメモが、はるか昔のことのように思える。おもちゃ箱の底に歯ブラシやビンのふたがあると、これに凝っていた時もあったなあと既に懐しい。今の知（息子・知生）は、もう全然違う方向を向いているのである。

☆くちやくちや

八か月くらいの頃から、小さい粒の集まったものを見

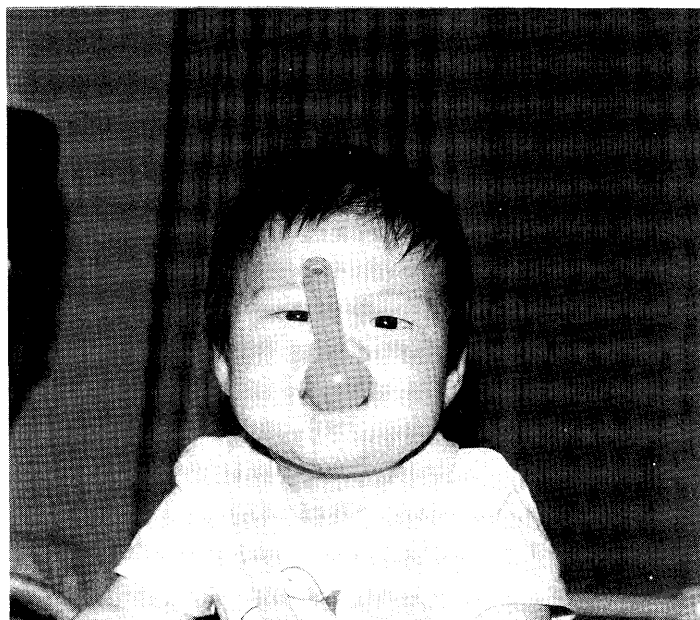
つけると、両手をピアノを弾くような形で揃えてくちやくちやとやるようになった。例えば柿の種。大人が食べているのを見つけると、さーっと這ってきて、菓子器に両手をつつこんでくちやくちや。あつという間に汗ばんだ両手は柿の種だらけ。また、例えば砂利。じーっと地面を見つめていたかと思うと、いきなり手を伸ばしてくちやくちや。あげくのはては、おもむろに一こ味見。

しかし、くちやくちやとやりたくなるのには、ある決まった量があるらしく、あられのようなものでも、少しなら何事もなく食べているのだが、たくさんになると、両手でくちやくちや、ということになる。知の頭の中で、理解できる量を越えると、頭の回路が違う部分とながってしまうのだろうか。以前、両手の指の数“十”以上の数は、数として存在せず、すべて「たくさん」になつてしまう部族があると聞いたことがあるが、赤んぼ族も似たところがあるのかもしれない。

☆似てる

◀ 何を思ったか、突然スプーンをくわえて

「プププ」。



知が身近にいるようになってから様々な絵や文学その他の作品の中の子どもの描写のほんの些細な部分に、「これわかる、わかる。」と頷くことが増えてきた。古いところでは、鯉にまたがって滝のぼりをする金時さんの図。あの金時さんの足が、あんよをする前の、足の甲にも裏にもむっちりと肉のついた赤んぼの足にそっくりなのだ。しわの刻まれ方までよく似ている。私は寝た子の足をしげしげと眺めては、いつも感心したものだ。新しいところでは、映画『ネバーエンディングストーリー2』の中に出てくるロックバイター・ジュニアつまり岩喰い巨人の子どもである。出番はほんの少しなのだが、ほったの肉のつき方といい、首のなさといい、ずり落ちそうなおむつといい、だだのこね方といい、誰かさんにそっくりだ。こういうのはやはり、よく子どもを知っている人が作るのだろう。知のおかげで作品鑑賞の眼が更に高まったと自負している近頃の私である。

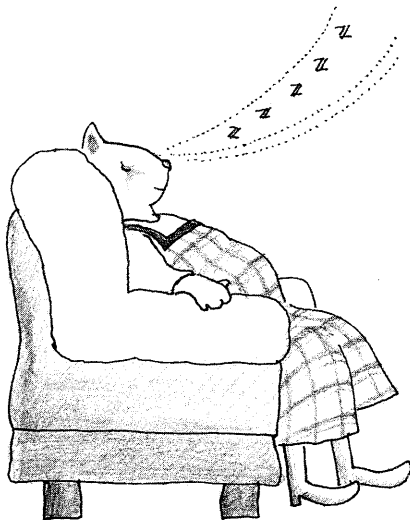
☆知にとっての本

私の勤める幼稚園でも本を踏んで歩く子がいる。内心私はそれだけは許しがたい気持ちだった。私自身、本は友だちのように大切にしてきた（つもり）。その友だちを踏むなんて。

それなのに、知は、本だろうが新聞だろうが平気で踏んづけて、何かを目ざしてどこどこ歩いて行く。時にはまるで、わざと踏んづけて行くみたいによろけたついでに踏んで行く。私の手や足でさえ踏んで行ったことも何回か。とてもこのデリケートな私の子とは思えない。しかし、絵本や写真の本を見るのはとても好きで、見るのもページをめくるのも楽しいらしく、またやってくれと私にせがむ。だが、ある時本を見ていたら、あつという間にビリビリ。「あーっ。」と叫んでしまった私を不思議そうな顔で見る。その時、知にとって本は楽しむための「本」でもあるけれど、ただの紙にも見えるんだなと妙に感心した。

幼稚園でも、わざわざ編んで作ったあやとりのひもをちょきんと切ったり、自分のくつ下を切ったり、髪の毛

を切ったりと、あつと驚くようなことに遭遇することがあった。その時は、「大切なものを、何てことするの。」と、こんこんとお説教したのだが、今にして思えば、あの子たちはりっぱな四歳や五歳の人たちで、一応は常識というものを持っていらっしゃるのだとこちらは思い込



んでいたのだが、時々ねじがゆるんで知と同じ気持ちになることもあったのかもしれない。何だか笑えてきてしまう。今度そういう子がいたら、どうしようか。

☆所々わかっている世界

知にとって、世界は混沌としていて、所々がばあっと曇り空の晴れ間のようにすっきりわかっているという感じであるようだ。フォークを使って食べたがる人なのに、川底の石も食べてしまう。「バイバーイ」や「こんにちは」ができる人なのに、他の女の人をおかあさんと間違えてしっかり抱っこされたりしている。おとなしくごはんを食べていたかと思ったら、あっという間にお茶の中に箸置きを投げ入れ、焼きソバを手でくちやくちややって、床にまいてしまう。「だめ」「やめて」と言っても、ティッシュやテープをどんどん取り出してしまう。そういう時の知は、まるで何かに取り憑かれたかのようだ。こういうところが、神の内と言うのかしらとぼんやり考える。一体この人の頭の中はどうなっているのだろ

う……。

しばらく前に『グレムリン』という、かわいい猿のような動物が、飼い方を誤ったためにワルの怪動物に変身してしまうという映画があった。当時の解説の「このグレムリンは原子力を象徴しているのであり、使い方次第で味方にも恐しい敵にもなる」ということばにふうんと頷いていたのだが、今の私に言わせれば、こちらが疲れていようが用事があろうがおかまいなしに、夢中になって戸を開けたり閉めたり、ステレオのポリウムを最高にひねって逃げたり、電話のボタンを押しまくったり、ひきだしのものをかき出している知の姿こそが、街の中を次々荒らしていくグレムリンそのものだ。かわいい時、よく気持ちが通じている時は、変身前の姿であり、止めても止めてもその手を振り払ってワルに邁進していく姿は怪動物になった、グレムリン・知。この小さい人たちは、まことグレムリンであり、エイリアンであって、人間の姿と似ているからといって、同じ常識の通じる仲間だと思っはいけない。そう思いながらも外出す

る時にはTシャツに吊りズボンに帽子などと、まるで人間であるかのように装わせてすまして出掛ける母ではある。

☆名前の重み

最近の子どもの名前には、親が凝りに凝ったという感じのことが多い。愛濃^{あの}ちゃん、大我^{たが}くん。まるで付けた人の思いが自ずとにじみ出てくるようではないか。以前は、こういう名前に出会うと何だか気恥ずかしく、親の思いの重さが感じられるようで嫌だった。

しかし、いざ自分の子の名前を付けてみてなるほどと納得した。「知生^{ともなり}」という名をひねり出すために、夫はほとんど一週間、睡眠を削って考え、どうでもいいと思っていた私にしてさえ、幾つか絞った名前のうち、これかと思っていただけなのが、母が神社で画数をみてもらったら良くないと消されてしまった時、思わず病院から神様に「!?」^{（!?）}「どうしてだめなんですか。」などと抗議の電話をしてしまったほどである。うちにしてこれほどの騒

ぎ。やはり重たいはずである。考えてみれば、親としてできることは、名前を付けてやることくらいなのかもしれないのだから。

☆さらわれた知

子どもの育つスピードは並大抵ではない。知も生後一か月で、体重が出生時の約二倍になった。毎日毎日ブクブクとふくらんでいた感じである、そのためか、毎日することは同じーおむつ・授乳・寝る・泣くーなのに、ある時ふとおっぱいをあげながら（この子は確かに知だけど、私の知っているあの知は、この頃どこに行ったのだろう）と、眠い頭でぼんやり考えている自分に気が付いてはっとした。もうここ一か月余の間に、ちょっと前の知の面影は消え、成長した今の知がここにいたのである。何だか未来を予測するようで、ふっと寂しくなった。昔話にも子どもがさらわれる話があったように覚えているが、こんな気持ちを味わったお母さんが語りだしたのかもしれない。

☆夫の育休宣言

夫は美術の講師として勤めながら、現代美術の作品を作り続けている。その夫が「ぼくは今年は作品を作らない。知と一緒に遊んで過ごす。」と言った時、私はびっくりし、一生懸命ひきとめた。知にとっては嬉しいことだが、せっかく作品を作り続けている上で、ひと夏休むことの損失も大きい。しかし夫は「なぜ出さないんですか。」とのグループ展の仲間からの電話に「子どもと遊ぶから。」なんて平気で答え、「こういう時期も大切。」などと言ってちっとも困った風ではない。もしこれが私なら、私にはとても自信はない。育休でさえ、丸一年休むという思いきりができなくて、知が八か月になった時仕事に戻った。半年余の休みだったのに子育てで充電して復帰なんてとんでもない、育休明けの四月五月は浦島太郎そのもので、ふうふうしていたように思う。大変なことばかり数えていた私と、「今だからかわいいんだ。」と知との生活を大切にする夫。何だか育児休暇の本当の意味を、夫に教わったような思いがする。

おわりに

知のことで、「ああ、これは。」とひらめいて、誰かに言いたくなることは、すべて取るに足らないことばかりです。今回も、整理し、まとめようとしたら、何だか書きたいこととどんどんかけ離れていくようなので、思いついたままの形で書き並べてみました。これらのことは、もしかしたら、その場に居合わせた者だけがわかるような類の面白さなのかもしれませんが、きつと小さい子との生活の中には、こんなできごとや思いが何百もふっとわいて出て、その場を楽しませて消えていっていのでしょう。これからもどんな予期せぬ出来事が起こるのか楽しみに、知と暮らしていきたいと思っています。

(はるにれの会)

明けまして

おめでとうございます。

「幼児の教育」も一〇〇巻まであと、十年を切りました。若い人の活字離れが進む中、字ばかり多くて読みづらい、内容が、即、明日の保育に具体的に役立てられない等…、いろいろな批判もいただいておりますが、本誌は、発刊以来一貫して、子どもにたずさわる方々の「保育の心」を求める努力に支えられて、今日まで続いてまいりました。この歴史ある保育誌が、読者の皆様のご支援で、今後も永くつづきますことを、編集にたずさわる者として願っております。

本年も、どうぞよろしく願っています。

*

新年号より内容も新しくなりましたので、御紹介いたします。

表紙絵は、昨年よりの巻頭写真へ子供讃歌／でおなじみの平野清先生に描いていただきました「人形と夾竹桃」です。

一年間、どうぞよろしく願っています。

山口大学の友定啓子先生の研究「子どもの笑いと保育」についての連載が始まります。一〜五歳までと〇歳について、年齢をおつて、隔月で報告していただきます。

河邊泉先生の「保育への視座」、仲明子先生の「遊びのスクランブル交差点」も二月号より始まります。

一昨年の東欧、昨年のソ連の政変など、世界が大きく変わろうとしている今日、チェコ便りを含め、海外の教育事情にも取り組んでいきたいと思っております。

虐待シリーズは、今日の子育ての問題を探ります。虐待とは何か。これは決して特殊なことではなく、私達の身のまわりに日常的におこりうることなのです。

この他、保育の研究、現場の報告、特集、等…盛りだくさんの内容で取り組んでいきたいと思っております。どうぞ、ご期待下さい。

(K)

幼児の教育

第九十一巻 第一号

(一九九二年一月号)

定価四五〇円(本体四三七円)

平成四年一月一日 発行

編集兼発行人 本田和子

発行所 日本幼稚園協会

東京都文京区大塚二―一―一

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

東京都港区三田五―一―二―一

発売所 株式会社フレイベル館

東京都千代田区神田小川町三―一

振替口座 東京九―一―九六四〇

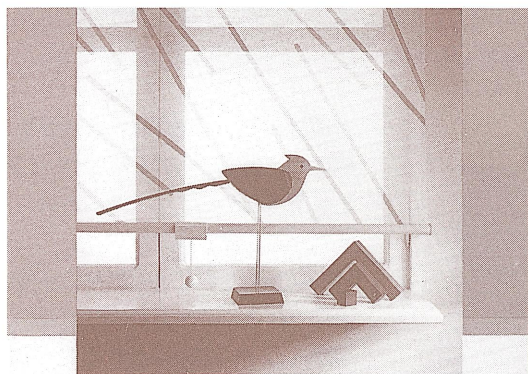
電話 〇三―三―二九二七七八―

●本誌購読のご注文は、発売所フレイベル館にお願いいたします。

●万一、落丁・乱丁などがございましたら、おとりがえいたします。

新しい保育の考え方やその展開方法の
具体的な実践レポート。

新しい保育を創造する保育者



新しい保育を 創造する保育者

網干正裕・小澤恒三郎・菊地明子／編著

幼稚園教育要領・保育
所保育指針の改訂の趣
旨を正しくとらえて保
育現場で混乱をさける
ための保育先導者によ
る具体的なレポート。
教育課程の編成、指導
計画の作成と展開など
保育現場での問題点が
掲載されていて保育の
見直しに活用できます。



網干正裕・小澤恒三郎・菊地明子・編著

A 5 判・240頁・定価2,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館

フレーベル賛歌

——子どもと人間の友あての女性たちの書簡——

旧ドイツ民主共和国アカデミー文庫と、パート・ブランケンブルクのF・フレーベル博物館に、フレーベルにあてた教え子たち約200人の1,000通を超える書簡が収蔵されています。一部公刊されていますが、それらを除いた約140通の書簡がドイツ幼稚園創設150周年を記念して1990年に出版されました。本書はその完訳本です。



書簡はドイツ教育委員会と大学教育学部の委嘱を受けたH・ケーニッヒ教授の手によって精選され、年代順に配列されています。

「さあ、私たちの子どもたちに生きよう!」という先生の呼びかけの言葉と、その根源にあたるキンダーガルデンの思想と、当時の社会や経済の困難さや人々の無理解とたたかう優れた魂に触れることができます。フレーベルを敬慕しキンダーガルデンの運動に身を挺した女性たちの知性と情熱を具体的によみがえらせます。

岩崎 次男 他15名・訳

A5判・420頁・定価4,000円(税込)

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社総括部(03)3292-7783(代)にお問い合わせください。

キンダーブックの
フレーベル館